

吉田精一著

浪漫主義の研究

東京堂出版

筆者略歴

明治41年（1908）東京に生まれる。昭和7年東京大学文学部国文学科卒業。中央大学，東京教育大学，東京大学文学部各教授を経て，現在埼玉大学教授，文学博士。著書——明治大正文学史，芥川竜之介，現代文学論大系（芸術選奨），自然主義の研究（芸術院賞），現代文学と古典，古典文学入門，等。

浪漫主義の研究

1970 年 8 月 15 日 初版印刷

定価 2200 円

1970 年 8 月 25 日 初版発行

© 著 者 よし だ せい いち
吉 田 精 一

発行者 岩 出 貞 夫

印刷者 山 岸 晟

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町3の5

振替口座 東京 2 7 0

電話 東京 (2 9 1) 8 2 2 6

目次

第一部 総論

第一章 日本の浪漫主義

一 対象と方法

二 性格としての浪漫主義

三 存在としての浪漫主義

四 日本のロマンチズム——初期浪漫派

五 日本のロマンチズム——後期浪漫派

六 自然主義以後のロマンチズム——類唐派

第二章 浪漫主義の成立と展開

序

一 啓蒙思想

二 浪漫主義の発生

三 浪漫主義の成立と輪廓

四 浪漫主義の詩歌

五	浪漫主義の評論	二五
六	浪漫主義の小説	二六
	第二部 初期浪漫派	二七
	第一章 嵯峨の舍御室論	二八
	一 史的位置	二九
	二 生立ち	三〇
	三 作品	三一
	四 理想(一)	三二
	五 理想(二)	三三
	六 浪漫的性格	三四
	第二章 「文学界」の運動	三五
	序	三六
	一 「文学界」の成立、およびその意義	三七
	二 「文学界」の発展	三八
	三 「文学界」の内容	三九
第三章	北村透谷の意味——我牢獄の分析——	四〇

序	一三
---	----

一 方法	一四〇
------	-----

二 「我牢獄」の分析(一)	一四三
---------------	-----

三 「我牢獄」の分析(二)	一四六
---------------	-----

四 「我牢獄」の分析(三)	一四九
---------------	-----

五 「我牢獄」の分析(四)	一五〇
---------------	-----

六 結語	一五三
------	-----

第三部 後期浪漫派	一五五
-----------	-----

第一章 「明星」の文学運動	一五七
---------------	-----

序	一五七
---	-----

一 東京新詩社の成立	一五九
------------	-----

二 東京新詩社の意義	一六六
------------	-----

三 新詩社の芸術および芸術観	一七四
----------------	-----

四 「明星」発展史	一八四
-----------	-----

第二章 泉鏡花論	二〇四
----------	-----

泉鏡花の輪廓——泉鏡花論の(一)	二〇四
------------------	-----

鏡花の表現——泉鏡花論の(二).....	三六
「高野聖」研究——泉鏡花論の(三).....	三四五
一 位 置.....	三四五
二 素材——成立.....	三四七
三 成立——構想.....	三四四
四 文章——表現.....	二五九
五 内容——意味.....	二六七
あとがき.....	二七五
索引.....	二九四

浪漫主義の研究

第一部
總論

第一章 日本の浪漫主義

一 対象と方法

「ロマンチズムについて物言うすべての人は、その語の意味を理解していると信じている。実際においてはこのことは各観察者によってすこしずつずれがある。されば人々は結論を得られぬ際限のない争いをくりかえしているのである」とイギリスのある学者がもらしてから (Tradition and experiment in present-day literature, p. 215) 四分の一世紀を経たが、もはやロマンチズムについて、明確にして不動な定義が得られたであろうか。私には疑問である。

もっともこれはこの種のイデオの宿命かも知れない。だが、ロマンチズムの場合は、レアリスムとか、ナチュラリスムとか、または古典主義などの場合と、内外の両面から見て、幾分ちがいがあろうと思う。第一に古典主義にしてもレアリスムやナチュラリスムにしても（この場合文学用語ないし文学運動に限定するのだが）ロマンチズムより輪郭および内容がよりはっきりしている。それはロマンチズムそれ自体の本質から来てもいるのであって、同じロマンチズムといいながら、たとえばイギリス、フランス、ドイツなどでは相当傾向にちがいがあ

(注1)

り、また各国での定義そのものすらが学者によって多少の相違があるほど茫漠としているのは、ロマンチシズムの内面的な性格がそうだからなのである。現在でもこれに適當する訳語のないこともこのことを証明しよう。第二に、レアリスムやナチュラリスムは、その提唱者自体が、より明確に自己の方法を意識し、自から説明を下して、性格や限界が比較的是っきりしている。それに対してロマンチシズムは、より自然發生的で、かつ社会的・政治的な方面にも深く浸透し(フランス革命がロマンチシズムの産物と見る見方も成立する)単に文芸思潮という以上に、浪漫主義の哲学、政治学、国家学、経済学などという、名称および思想系統すらも存在するほど、外面的に範囲が広い。そういうことが、同質的な理解をはばんでいるのである。

レアリスムやナチュラリスム、あるいは古典主義ならば、あえて面倒な定義や限定からはじめないで、すぐに問題に入っていくことができる。しかしロマンチシズムの場合は以上の理由から、一応外延的な制限を加えて、概念のあいまいさから生じる意味の混乱をふせいで置く必要がある。

まず、我々はロマンチックとロマンチズムとの概念を区別しよう。これは多くの研究者がころもみていることだが、手近いところでは、谷川徹三氏の「浪漫主義」(岩波講座「世界思潮」に従うのが便利である。ロマンチック(浪漫的)とは、元来人間本来の性向や感情に存在する一志向であり、芸術上ではクラシック(古典的)に対する、一般的な広い意味の概念である。スタンダルによれば、ロマンチックな文学とは「各国民に、その習慣と信仰との現状において、最大のようなこびをあたえ得るような文芸作品を提供せんとするもの」(Racine et Shakespeare)である。すなわち、優秀な芸術は、その生じた時代には、ことごとくロマンチックであったということになる。この意味のロマンチックは、時代や社会に制限されない一般概念である。

ロマンチズム（浪漫主義）は、ロマンチック（浪漫的）より一層限定される。そのちがいは、たとえば我々があ
る風景をロマンチックというが、浪漫主義だとはいわないという例でも見られる。すなわちロマンチズムは、
芸術や思想や生活などにおける、ある一定の方向をもった精神態度について名づけられるのであって、したがっ
て自覚的でもあれば、反省的でもある。

だがこのような一般的精神態度を意味するロマンチズムは、さらに狭義な、歴史的意味の浪漫主義と区別さ
れねばならない。ペエタアはスタンダールの言葉を敷衍して、浪漫主義は、その本質的特性からいえば、あらゆる
時代に、いろいろな程度で、個々の作者と彼等の製作とにあらわれる精神である（Classicism and Romanticism）
といっている。あるいは青年時代が一般に浪漫主義で、レアリスムの壮年を経て、象徴主義の老年に入るとい
う方もされている。文学史家の中には、一時代の興隆期の文学はつねに浪漫主義である、といういい方をする
人もある。

ところが歴史的な意味の浪漫主義は、特定の時代の思潮であって、過去においてただ一度、一定の期間におい
ておこったムーヴメントであつたものを意味する。それは通常古典主義（クラシズム）とよばれるものが、たと
えばフランスならば一七世紀の文芸をよび、それ以外をささず、自然主義が一九世紀後半、一八六〇年代から九
〇年代までの三〇年間を中心とする文芸運動のみをさし、それ以上にわたらないのと同様である。

この意味の浪漫主義は、大体一八世紀末から一九世紀前半にかけて、ヨーロッパを席捲した思想および芸術を
さすのである。一般的な意味での浪漫主義とは、この歴史的觀念を一般的觀念にまで拡大し類型化したものであ
って、論理的には歴史的なロマンチズムの意味が把握されたあとで、はじめて成立すべき概念である。今日に

あつては、ロマンチズムが一応終結した現象となつたために、その歴史的運動について多くの知識をもたないものも、そこから一般的な浪漫主義という思想感情を抽出している。もちろん歴史的な意味での浪漫主義といえども、人間本来の、時所を問わないロマンチックな志向にもとづくものであつて、それが一定の社会的条件と、またある個性によつて純粹化され、もしくは拡大されて表現されたものにほかならない。この歴史的な浪漫主義運動の中核となつた芸術的集団、もしくは芸術家のむれを浪漫派と称するのである。すなわち浪漫派の運動ないし業績が、浪漫主義という性格の典型となるのである。

であるからロマンチズムについて発言する場合には、この浪漫派を対象として調査することが第一の要務となるのである。我々の課題は日本のロマンチズムであるから、日本の浪漫派の文学および人々について研究することが、我々の仕事となるわけである。

ところで、この際我々の前に立ちふさがる方法上の問題がいくつかある。その一つは必ずしも浪漫主義特有とはいえないが、歴史と本質との関連をさぐる場合の一般的課題としての方法論上の問題である。その二は日本の浪漫主義についての特殊にして具体的な方法についてである。

まず第一の問題について考えると、浪漫主義もしくは浪漫派を、我々は歴史的存在として一応把握することに目標を定めた。その際対象としての浪漫主義ないし浪漫派なるものの具体的な確立が、当然前提となるわけである。すなわち何時、何を、そして誰を浪漫主義または浪漫派とみとめるかということである。文学史家ブリュンチエールが「浪漫主義の定義は語源学の問題でもなければ、学説の問題でもない。むしろ歴史の問題である。そして浪漫主義という語は、それ自体の中に重んずべき意味をもたないから、唯作家と作品とが、歴史を通じて、

即ち時を通じて、之に与えたるさまざまな意味の継起によって充たされているにすぎない」(フランス文学史序説)といっているのは、漠然たる思潮をでなく、歴史的な人間と作品に目標をおこうという主張で、実証を旨とする文学史家としては一応当然である。浪漫主義という存在が、一つの具象的な、容易に手にとりうるものとしてあるのではない。あるものは、そして我々の直接の対象となるものは、個々の作品と個別的な人間だけである。

しかしまた、一面において、かような個々の歴史的生起の背後にある、歴史哲学的連関上の意味をくみとるために、個別的なものの中から内面的共通性をつかみだし、それに立脚して各個性に全体を構成する意味を措定して、一つの体系化をはかることは、対象を統一的に理解するゆえんでもあり、学問性をうるための要請でもある。一般に文学史的、あるいは世界文学の観点から見て、日本におけるある時期のある種の文学運動に、ヨオロッパの浪漫主義と共通の特色をみとめられるがゆえに、日本の場合をも浪漫主義と名づけることは、これまたしかるべき理由がある。というよりも、歌や俳句を抒情詩の範疇に入れて統一をはかると同様、文芸学的に必須の操作である。

ただその間におこる矛盾は、具体的な作家や作品を通じて、浪漫主義もしくは浪漫的の本質を明らかにする場合、対象を浪漫主義と決定する根拠は、浪漫主義の本質直観によるほかはないということである。すなわち浪漫主義なる概念が先行して、それによって具体的な作品や作家を色別けするということは、ほんとうをいえば文学史的研究の本道からは遠いのである。ブリュンチエールのいうように、まず具体的な作家作品を追求することによって、浪漫主義的性格を定立するのになければならぬ。ところが、事実としては、浪漫主義の本質把握が先行せずしては浪漫派なる存在を具体的に確立できず、そうかといって浪漫派についての具体的な研究がなくては、浪漫主義の妥当な解釈ができない。これはひとりこの場合にとどまらず、この種の歴史科学を体系化しよう

とする場合、本来ともなうところの二律背反的命題ともいえるのである。（とくにこのことは、日本の浪漫主義について問題になる。すなわち、日本では浪漫主義を名乗った、もしくは自覚的に唱道した文芸運動が、少なくとも明治時代には見あたらず、それを決定するのは研究者の見解によるからである。——後述参照）

これを解決する道は、さしあたって次のごとくであろう。現象の多岐と混沌とにもかかわらず、浪漫主義とよばれるべきものが各国にわたって存在する以上、それを貫いて存在し、それ以外のものと区別される性質があるはずである。赤い色には濃淡があり、明暗があり、とりどりであっても、それが一様に赤とよばれる性格は共有する。すなわち赤を赤たらしめるように、浪漫主義を浪漫主義たらしめているもの、現実存在の中にふくまれる可能的存在といふべきものがなければならぬ。いいかえれば、それは浪漫主義という具体的存在の志向性である。この志向性を直観し、分析することによってその本質契機をいくつかみちびきだすことは可能である。日本の具体的な作家作品に対しても、この種の作業を行なうことによって共通の浪漫主義なる志向性の、根本的契機をつかみだすことをせねばならぬ。その有無によって対象の弁別もできるであろう。これが一つ。

もう一つの道は逆に、個別的な社会現象としての浪漫主義の「あり方」についての究明である。

浪漫主義が各国に起こったのは、当然起こるべき理由があったのであるから、その発生契機となった時代および社会とこの芸術運動との関係を見ることである。同質もしくは等質の運動が、別々の場所ではほぼ同時代に起こった場合はもちろん、多少時代をことにしている場合にも、そのような運動を産んだ社会が等質の発展段階にあることが想像される。文学芸術等の変化や発展は、とくに一八世紀や一九世紀の西欧と日本とのように異種の文化圏としてへだたっている場合においては、一様の発展段階理論では処理し得ず、一方の文化の他方のそれへの